

自由連合

№40-4
追加付録

発行所 自由連合事務局
向井 存

〒141 東京都目黒区
自由連合事務局
電話 03-3408-1411

その昔はいつた。もし戦争
がいつて存在したとあるなら、支
援、連帯、互恵等の言葉、言葉、
言葉だった。

日本交際社社説

廿代田映子

(一)

一度フリーランの重さだが、恋愛
の敗北に対して、常に不死身の三
枚目を繰り返しているように、バ
ルタイもまた、全ての戦争終体の
敗北に耐えて、常に不死身であり
続けている。けれども勿論、どち
らにより大衆に支持されているか
は、自明のことである。それは勿
論、バルタイの方なのだ、という
訳ではない。

そして一方、かつての全日本
連合の、一体性であったのだから。

父親を闘死させた、その死守を
伯父廣に継ぐ取られ、そして遂に
この結婚をも破談にされて、人
吉の街に追放され、しかしそれ
に耐え、自己否定に自己否
定を重ねて流民型戦士となった、
五木の里を出自とするあの絆は母
のお墓の傍で、彼等は決して
いたのであった。けれども勿論、
どちらにより大衆に支持されてい
たのかは、一わまた自明のことだ
である。

全日本交際社で明確に敗北
するところによって大衆から追放さ
れてしまった。しかしそれにも率
らず、流民型戦士として自己形成
し、唯名的存在の全日本交際連合
を、タイミンクよく結成していっ
たのである。

全日本交際社の旗の下には、全日本

国の死体が埋まっている。これはね
本心に信じて良いことなのだ。

しかしそれにしても、互いに自分
の力をためよう互いに相手の力
をためよう、互いに、互いに、
私達と互いに争う私達は、今、何
処に、誰と争っているのであろ
うか。

言葉が死語となりドラマが論文と
化したといつては、その論議
が実践的にのりこえられたこと
を意味する。僕たちはより高い
ところへ上ったのだ。

山本義隆の死
1965年5月15日
おれの世界

「ドラは自らを武装せしめ、他
者に対してはわれわれに組みす
るか、敵対するかをせざるもの
である。オニ者としては決して
ビフを受けとり得ない。タチカ
ハは見物するところを許さず、い
ずれにせよ、読者は連帯がで
るべくそれと粉砕する武闘を
創り出すか、それかを問われ
る。」
(同書)

かつて昔の上にいたわれらは、僕
達は、われわれは、私達は、今一体
何処へ行ってしまったのか、一足先
に、遠い世界に旅に出たのか。それ
とも、赤い風船に乗って、より高い
所にある三里塚へ、沖縄へと進撃し
て行ったのか。

戦争の敗北の後形成された
戦線とは一体何であったのか。戦争
の最中に現れた私達は、例え
ば三里塚戦争の最中に於いても、や
はり私達として現れたのか。

つまり全日本、全日本共闘、とし
てバルタイは、戦争の敗北の後
大衆から、そして時には下宿の三疊
間の下宿も、三里塚へと追放され
ていつてしまったという流民型戦士
に似ていないのである。

大衆が駄目なら三里塚がある。中
編が駄目なら北方領土もある。ま
るくある話じゃないかい。

おひあーさん、と私達はもう言
うべきだ。おひあーさん、本当のこと
を言います。私達はもう遠くに行
きました。私達は遠い遠のまた遠です。
全日本共闘に勝利していったと同程度
に、私達は私達に勝利していつてし
まったのです。おひあーさん、本当の
ことを言います。自由連合は、とし
て革命は、遠く去りました、と。

私達に勝利した私達は、三里塚の
地下に穴を掘った。そして地下につ
ち立て、つれたデフシネの旗、全日本
共闘の旗の下には、バルタイの旗の
下には、双頭のワシの旗の下には、
私達の死体が埋まっている。これは
ね、本心に信じて良いことなのだ。

(二)

戦争がかったてはなやかなりし
頃は、確かに一枚のビラは、山本義
隆のビラ・コミュニケーション論の
出き力を有していたものであった。
一冊の教科書、一枚の紙幣、一個の
餃子、一丁の武器では断じてない。
他でもないその一枚のビラが、あれ
なこれの奥で、その受け取る方
に通達したものであった。

